

大韓民国・濟州島〔1〕

— 島民と風習 —

横田 悟



積が1.819Km²、丁度、大阪府の大きさと変わらないのであるが、中央に漢拏山(1.950m)が、悠然とした姿を見せているため、島という感じからはほど遠い。又、もう一つこの島を強く印象づける言葉として“濟州三多”というものがある。これは古く李朝時代より言い伝えられた言葉であり、三多とは風、石、女を言い表わした言葉である。なる程到着した日には台風を思わせるほどの強風に遭遇した。石についても漢拏山の火山活動によつて生じた石が道を塞ぐほどにゴロゴロしており、風を防ぐための塀としてどの家にも多く見受けられた。しかし女については、統計上では男9に対し、女は

一口に韓国というが、人々は一体どのような目で見ていたのであろうか。私を例にとるものなんだが、第二次大戦後の日韓関係の悪化、国際情勢の不安定などで「近くて遠き国、韓国」というイメージを持ち、日本人に対する国民感情も、それほど良いとは思っていなかったのである。しかしもし私同様の考えの人がいるとすれば改めるべきであろうと私は言いたい。特に濟州島においては日本に多くの人々が来ているせいか、行く先々で手厚いもてなしを受けたのである。この濟州島は面

10と少し、勝つてるとはいえ、それほど強い印象は受けなかった。それよりも聞くところによると、最近、濟州島は観光に力を注いでいるため、現在は女という言葉が良いアピールになるというのが本音らしく、実際は、それに代つて雨が代表されるということであつた。又現在、濟州島は準戦時体制の下での生活を強いられているのだが、島のどの村に行つてみてもなんとなくのんびりしたムードが漂い、人々の生活からそういった緊張した空気は感じられなかった。

概観はこれくらいにして、さて私達一行7名は3月4日濟州島に渡り、7日から16日まで、島の広範囲を踏査、東西での風俗、習慣の比較といった意味から、東廻り4名、西廻り3名に別れて実活動に入つたのであつた。当初、今回の調査目的として、(1)、移居の習慣に関して (2)、冠婚葬祭に関して (3)、文化、旧跡に関して (4)、シャーマニズムの実態調査 (5)、村落におけるコミュニケーションに関して。この5項目に主眼をおいたのであるが、予備知識となる文献が古かつたせい、実情は相当異なつていた。それというのも韓国では現在、政府による新生活運動と称する合理化運動のため、(1)の移居の習慣、(2)の冠婚葬祭(4)のシャーマニズムなどは殆んど見られなくなつたり、違つた形のものになつてしまつていたのである。もう少し掘り下げて述べてみると、(1)の移居の習慣、つまり部落ごとに引越しをする習慣のことであるが、現在は、殆んど見られなくなり、ただその名残りとして、民族信仰「新旧間」というのが残存するだけとなつている。この「新旧間」とは、大寒後5日より立春前3日までの一週間を指し、その間はふだん、島民の生活の守護である神が昇天し、この「神のあたり」のない時期に人人は家の修理を行なうのである。(2)の冠婚葬祭については実際に見聞できたのだが、前述の新生活運動の影響で韓国本土とたいした違いは認められなかつた。

ただ葬式に関しては、非常に複雑なものが見受けられた。(詳細は報告書参照)又、この葬式とは直接関係はないが、これと少し関連して私が感じたことを記しておきたい。それというのは、一応の葬儀も終わり、私達も、いくつかのグループの一つに入れてもらつて、飲み食いを共にしながら話をしていたのであるが、そのうち、ある人がこんなことを言つた。

「私たちや別に葬式に来ているんじゃないんだ。まあ一種のリクレーションさ」と。この言葉を耳にした時、私はその言葉の裏に潜む彼ら島民の生活の貧困さを痛感させられた。

困りには人々の笑い声や子供を遊ばせる母親がやたらと目についた。一年を通じてリクレーションと言えるようなものは一度ある無しの島なのである。またこれとは対照的に、死者を出した家族は豚を殺したり酒を買つたりして、この日のために最低10万won(約13万円)は要するとの事である。念のために言つておくと一般サラリーマンで月給1.5万~2.0万won、大学教授で2.5万~3.0万wonである。そうした中でどれほどの痛手を被るか想像され得るであろう。しかし、そうすることを人々は義務であると感じているようであり先ほど言つていた人も自分にその不幸が巡つて来たときは、きつと今日の人のように、人々をもてなすことであろう。これがまたここの島民の国民性というものであろう……………。

更に葬式と直接関係のあるものとして「墓」があげられる。実際濟州島に行つてみて、まず目についたのがこの墓であつた。バスの窓からは、畑という畑に墓が作られていた。このまま進むと約50年後には、島の耕作地は、すべて墓と化してしまふという話であつた。墓の位置、方角等が、風水師(chong-shi)によつて決定されるからである。彼は風水説に則り、地脈の流れを調べ死者を出した家族に墓の位置等を教えるのである。

島民の方も風水説を信奉するものが多く、墓の位置は子孫の繁栄をも左右すると信じている。だから、自分の畑であろうと、他人の土地であろうと、なんとか買い取つて(土地所有者が売却を拒否することはまず考えられず、そんな事をすればその人はその土地で生活できないという。)作るという結果が生じて来たのである。



畑の中の墓（金寧里）

新生活運動の影響で共同墓地化が進められているが、それでも依然としてこのような不経済な墓があらら、こちらに乱立している。

「祭」については、私達は丁度、大静邑仁城里という部落で小祥という祭に出くわした。これは父母の祭といつてその死後3年間、喪服を着用し、又2年目に「小祥」、3年目に「大祥」と呼ぶ祭事を行ない、村中の人、生前の知人すべてを招待し、豚を殺してもてなすのである。しかし、仮りに3年間に2人の人が亡くなるとすると、その家族はむこう6年間喪にふくさなければならず、その間、仕事にも支障をきたすし、この間の出費は全く馬鹿にならない負担として生活に影響を及ぼすのである。

つづいて(3)の文化旧跡に関しては、いろいろな民話の中に日本との関係を強く感じさせるものが多く、ここではその内の二つを紹介してみよう。

その一つは三性穴の話といつて昔、濟州島が耽羅国と呼ばれ、まだそこには人間が存在しなかつた時代、その地に3人の神が地中より湧き出た。彼らが生活を始めた頃、島の東岸に箱が流れ着き、その中には処女が3人その他穀物の種、牛馬等が入っており、使者が言うには「我々は日本の国使

であり、我が王妃が言われるには、西海の国に神人3人がお生まれになり、その3人は今、国を開かんと望まれておる。しかし配偶者たる者がいない故に、臣に命をやり、この様に3人の処女を使わされたのです。」との事であつた。その後、3人の神はそれぞれ女をめとり、耽羅国を開いたという。もう一つは蛇穴の話で、それによると李朝中葉の頃、金寧里近くのある大きなほら穴に大蛇が住んでいた。この大蛇、時として大暴れをし、近隣の村々を荒らし、人命にも危害を与えた。村人達は、この大蛇を恐れ、怒りを静めるために毎年1人の処女をいけにえに捧げていた。ここまで言うとうなずかれる人も多いと思うが、その通り、退治するという下りまで、八岐大蛇の話とそつくりなのである。この様にこの他にも日本との関連を表わした話が実に多いのである。

(4)「シヤーマニズム」については、政府による行政的圧力によつて行為自体が禁止されている現状にあるので、巫女や風水師は口を閉ざしてしまい調査は一向に進まず、ただ彼らが祭事を行なつていた場所である堂(tan)の跡だけが畑の片隅に見られた程度であつた。これとあと一つは我々が翰林邑にある海村において見かけた全長80cm程のわら船であつた。これはYongun-kuと言われる祭の際に用いられるものであり、その祭とは、Yongun という神が来てその神は海女の獲るいろいろな物の種を海に蒔いてくれると考えられているのである。そこでその神がやつて来て帰つていく際、神に供えるもの、例えば御飯、餅、果物、魚等を一緒にわら船(Banshi)に載せて海に送り出す。するとわら船は、次の年にまたやつて来て海女の獲る物の種を蒔いてくれるという祭なのである。

(5)の「村落におけるコミュニケーション」については、あまり見るべきところはなかつたように

思われる。この他には、民家特にその造り、食生活、海女、教育等に調査が進められたが、このうちで海女に我々は特に興味を抱いた。しかし彼女達にうえつけられた歴史的な背景から来る閉鎖的な性向から自分達だけの城を形成してしまつて現在もなお、外との接触は少ないようであつた。このため我々が話しかけても警戒してか、話もしてくれず、写真さえ十分には撮らせてくれなかつた。しかしこれには時間的に不充分であつたという理由も考えられるので、この調査は、夏期合宿として行なわれた海底の技術による海女調査報告に期待したい。

ここで、再三再四登場してきた新生活運動について述べたいと思う。まず結婚、葬式といった儀式については、費用の節約、儀式期間の短縮をすするため、儀式における人員の整理、小祥、大祥といった祭の廃止、簡素化の方向に進んでいる。墓についても、先ほど述べたような非生産的な慣行に対する一つの対策として、共同墓地化が考えられており、一部旧左面西金寧里の傘山では山を利用しての共同墓地が実施されている。それによると、子孫のない墓はそのまま共同墓地に移され、一方子孫のある墓は全部5ヶ年計画で移墓の実施がなされるという事である。(実際は色々とその家の家風等と関係してなかなか問題も多いということであるが)この墓にも大きな影響力を及ぼしていたシヤーマニズムについてもその主役となつ

ていた巫女(mutan)や風水師は現在、何らかの祭事を行なえば、法によつて厳格に処罰されることになつている。そこで現在1里(最小行政区分単位)に1~2名の巫女がおり、堂はまた1ヶ所づつ存在しているが、新生活運動が活発になつて来たため去年は、80ほどの堂が崩され、今年中に全壊されるということである。

しかしシヤーマニズムはまだ島民の生活に深く浸透しているため、当局の目を逃れて行なわれているようである。このほかでは、濟州島独自の便所の改善等を挙げる事が出来よう。

今後の方針として政府は濟州島を「第2のハワイ」にしようということから、6年前には漢拏山の麓を横切つて北の濟州市と南の西帰浦の二大都市を結ぶ横断道路を完成させ、今年の冬には飲料水、農業用水の確保のため漢拏山麓に最大のダム建設を計画しており、又、電気もこれにより今年中には全島にゆきわたるとの事である。(現在、水道が通つているのは一部の都市に限られ、電気は全島の約1/3である)又、3年以内には現在の一周道路を幅25mのアスファルト道路にするというように、漢拏山のもと火山島として不毛の地であつた濟州島にも今や新しい波が押し寄せて来ているのである。

(法学部3回生)

